

## 元蕩 — 一首の呉歌

楊逢春（蘇州画信協会名誉顧問）

元蕩（げんとう）は、江蘇省呉江（蘇州市の南に位置する市）のほitori莘塔（しんとう）という小さな鎮にある一つの湖蕩（浅い湖）です。‘元’は大きな意思を指し、‘蕩’は広大無限を指します。水産資源が豊富な湖沼として、現地では知られています。この湖沼だけで人々を大いに富裕にさせうるので、元蕩と称えられています。ただし別の人の説によると、元蕩は本来、鼈蕩（げんとう）と呼ばれていた。千年生きるとされる一匹の大亀（鼈）の伝説に因みます。この大亀は計り知れない神秘の力や仙界の靈力を有し、湖沼近くの村に平和な安らぎ、勢いの隆盛、それに幸福、といった影響を及ぼしうる、とされます。だから鼈蕩から元蕩と名付けられ、心からの敬いと祈りが込められています。

私の母方のおじは、元蕩の周辺にある陳家湾に家を構えています。莘塔（しんとう）という小さな鎮に属し、湖の対岸にある小さな村落です。湖蕩（浅い湖）から流れ出る一本の小川が村落を二分し、港南地区に20戸、港北地区に20数戸あります。住民は川に臨んで代々暮らしています。住民は小さな河口に設けられた港で、米を研いだり野菜を洗い、ご飯を煮炊きする水を汲み、洗濯をしたり、日光浴をしたり、子供達は水遊びを楽しみ、老人は釣り竿を傾けています。水辺から時々、数人のおぼろげな呉の方言が聞こえてきます。人々は心ゆくまで岸辺でこの澄み渡っている小川の水に親しみを抱いています。根本的に湖なしでは水を飲んだり生活に用いる心配をしないわけにはいきません。この平和な人生や自足の喜びは村全体を籠のようにすっぽりと覆う安らぎや絶対的静穩をもたらし、岸を揺らすさざなみは郷村の安らぎの極致です。村内の小川の水は、常に澄み渡っていて、湖蕩（浅い湖）から絶えず静かなせせらぎが流れ来て、小さな村落に落ち着きをもたらされているかのようです。

静かな湖蕩（浅い湖）でも黙々と湖に沿って人家が豊かな喜ばしい暮らしをしています。小さな村では農業が主で、水稻が主要な作物です。もちろん、水は不可欠です。春は水田を耕して苗を植えます。夏は灌漑をして稲の株を中耕や除草をします。秋にはどろりとした液体を水田から排水します。冬は醸造して貯蔵します。全部水を頼りとし、澄み渡った湖蕩（浅い湖）の水なしではできないことばかりです。水があること、それも澄み渡った湖蕩（浅い湖）の水があるからこそ、米の豊作可能という希望を持てるのです。苗には水が不可欠です。人は水なしで生きられましようか？ 別の人は数日水を飲まなくても、唇が乾燥し舌が乾く話である、といます。もしも水田に水がなければ、即刻立ち枯れ、生活基盤を失い、社会不安になってしまいます。民は衣食を以てその日があるというのに、元蕩なしで、どこに食糧庫がありますか？ 元蕩はかけがえのない食糧を産出する宝庫の一つです！

湖蕩（浅い湖）の水は宝です。湖には数え切れないほどの水産資源があり、これらも宝

です。タナゴ、コノシロ、小鮒<sup>こぶな</sup>をはじめ名前の知られていない小魚がたくさんいて、群れを成し、大きな塊で、湖を周遊しています。鱸<sup>すずき</sup>、鰻魚<sup>けつぎよ</sup>（桂魚）、鯉<sup>こい</sup>、大鯰<sup>おおなます</sup>も生息し、湖底の深いところを泳いでいます。ニシ（マキガイ、螺蛸<sup>luo[2]si[1]</sup>）、蛤<sup>はまぐり</sup>、河蟹が湖の岸を張り付くようにゆっくり<sup>は</sup>匍<sup>は</sup>っています。時にはかなりの大きい白鮒<sup>しらぶな</sup>が高く飛び跳ねて泳ぐこともあります。春3月は銀鱗の魚が湖の岸近くに来る季節です。帆掛け船が、回遊する魚を獲る場面は壮観で楽しげです。漁を終え魚を満載した船が戻る中、漁網を用いた小舟にも心が嬉しくなる気がします。梃子を用いて軽く敲く漁法の船の帰航の様子も、漁業が豊かさを醸し出す一年の風物詩です。湖に満ちているのは魚だけではなく、湖で育てる水野菜も豊富です。なめらかな口当たりの蓴菜<sup>じゆんさい</sup>、青若芽が白く輝いていて清潔感のあるマコモダケ（茭白<sup>jiao[1]bai[2]</sup>）、滋養強壮に優れたオニバスの実（鶏頭米）、玉のように白く美しいレンコン、桃色のヒシの実（水紅菱）、無帽のヒシの実（光頭菱）、道端のヒシの実（野角菱）、様々な美味しい素晴らしい食材があります。当地の米、魚、水野菜をご覧になれば、水なしではあり得ず、湖蕩（浅い湖）の恩賜であることがご理解いただけることでしょう。これらは古くから語り継がれてきた魚米の郷里、江南の水郷、水国天堂を構成しています。

ここでは、次の様なものを見かけることができます。可愛らしい女の子が桶<sup>おけ</sup>にのんびりとヒシの実を摘んでいること。人々が田を耕したり漁労に忙しくしていること。菜の花畑が黄金色に、稲が青々とスクッと伸びて緑のひものように水田が見えること。落ち着いた紺碧の清水によって北国と大いに異なる風光を構成している。例えば、多様な形と彩りの虹の橋、河の近くの民家や水閣（水辺にある高い建物）の下にある河の橋、波に揺れる小舟、レンコンを売る声、四方八方に巡らされた水路網、滾々<sup>こんこん</sup>と湖の浜辺に流れる水、等々あります。天気が晴れの時、“小さな蓮<sup>はす</sup>の露わな先端に、蜻蛉（トンボ）がずっと飛び立つ”様子は清らかで美しい湖の景色であり、次々と静かな夢のように、心を平穏にさせます。ご覧になれば、“蓮の葉がはてしない紺碧の空に接し、蓮の花の赤が格別に日に映える”様子は広々と果てしない風景で、心を広々と開いてくれます。このような景色は都市にはなく、静穏の美のようであり、、壮麗の美のようであり、青々とした波は智慧の楽しみ<sup>かな</sup>のようであり、決してにぎやかな音を奏<sup>かな</sup>ではしないけど、“軋神仙（蘇州の伝統的祝日。旧暦4月14日に中国神話の八仙人の一人、呂洞賓<sup>ろどうひん</sup>の誕生日にあたる。）”に当地にいる方はこの光景を味わうことができます。

江南の大きな湖には必ず点々と連なる湿地があり、そこでは思いがけない神鬼の昔話に

出会うことがあります。大きな<sup>かけら</sup>欠片の湿地は大きな湖の貯水池です。雨期には、水は湿地に向かって流れ、湖水によって堤防の護岸から溢れるのを防いでくれます。乾期には湿地に向け大きい湖の水が送られても、依然として湖の水位を豊富に満たしています。湿潤の頃でも乾燥した頃でも湿地は美しい絵画のような彩りをしています。そこには、様々な草花が生い茂っています。高低ふぞろいの中に、黄色い花、白い花、赤い花があり、青い草、緑の葉、紫の茎と様々な彩りがあり、様々に入り交じっています。このような色彩や<sup>けなげ</sup>健全な草花が多様に存在しています。ブンブンと蜂や彩り豊かな蝶、それに飛び回る黄雀も花に引き寄せられます。草の陰深くにはカワセミが何時間も音を立てずに潜んでいます。腹を空かした野鴨が魚や<sup>えび</sup>蝦を捜してうろついています。日中日差しが厳しい時間帯、樹木や梢では蝉が次々と鳴きます。おぼろ月夜には、水草の中で青蛙が所々で鳴き声が響き、加えて、鳥が叫び、鶏が啼き、虫の音が響き渡り、さながら様々な彩りのある田園交響曲の様相です。湿地には様々な彩りがあり、音があります。また、お年寄りに同行している小さな子供達が喜んで食する<sup>くわい</sup>慈姑、<sup>ほつさい</sup>クログワイ（葶藶）、<sup>うじよう</sup>サトイモ（芋苳）が育っていて、米の代替にもなるよい食材です。湖と陸地との接するところには、大きな柳や烏楸樹（ナナカマドの一種？）が衛士が付近を守っているかのように、整列して直立しています。ぶつかり寄せる波を防ぎ、勇敢に湿地に住む家族を保護してくれます。珍しいことに、これらの木々は土から生まれ出るのではなく、水の中から生まれて、水中で成長して直立するのです。水に<sup>ひた</sup>浸ることを問題にしません。当時、湿地に対する人々が気候を調節する機能はまだ理性的認識を欠いていた。地元の老婆達は湿地について人の能力では不完全なので善良で美しい昔話を語り、伝えてきました。牛飼いのところに湖の仙人の娘が嫁いだ話や<sup>た</sup>田螺が娘の帯にくっついてお役人から娘を家に戻す話、魚や蛤や鯉の精が美女が登場する話、竜王に招かれて娘婿になる話、等々があります。こうした昔話は美しくて神奇なだけでなく、幼小の我々に常に湿原に行きたいと思わせたり、奇跡の出現をみたいと思わせませす。他方、子供をむやみに湿地まで行かさないように、老婆達は恐い大亀が岸に近づく人を食べてしまうとか、牛の頭や馬の顔をした化け物が人をバラバラにしてしまう昔話も作り出しています。それゆえ、子供達は湿地に対して、愛着と恐れを抱き、往々にして湿地にずっと留まろうとはしません。

まさに月に曇りと晴れとか満ち欠けがあるように、天には測れない風雲があります。湖蕩（浅い湖）でも時には瀧のような大雨があり、<sup>ふうせいかくれい</sup>風声鶴唳（戦に負けて落ちのびた将兵が、風の音や鶴の鳴き声にも驚き、敵が寄せて来たかと恐れるように、期にする必要のないささいなことにも、おじけづくこと。）したり、怒濤の勢いで水が逆巻き、ゴウゴウとぶつかることがあります。人々は常々一種の天意や人や物事への破壊を通じた事前の警告とし

て畏敬の念を抱くことがあります。青天の霹靂の聲は“良心にそむいてはならぬ”という  
嚴命のようであります。別の人は次の様に言います。湖底にいる老亀がもぞもぞと動くこ  
とと天気とはとても縁が深く、一度怒らすことがあれば、災害によって予め警告する  
ので、神の靈驗へ畏敬の念を地元の人は増した。このように天気は短時間の内に変わるも  
ので、雨の後に晴天と言ったことはありふれています。元蕩は依然として湖の光がきらめ  
いています。

元蕩の湖面は美しく清らかに輝き、周辺の環境は平穩で静かです。月夜には天上で白く  
光り輝く満月があり、湖の中に月影があり、一瀉千里（物事がはかどること）で、隅々ま  
でさざ波のように安らぎの光を降り注ぎつつ、大地を銀色の世界や幽玄の静けさ、さら  
には変化に富んだ風情の景色に変化します。地元の人々は当然月下に船遊びをする風雅を有  
していません。納涼の頃、月光の下で稲の成長を喜びながらくつろいで会話します。彼等  
は湖蕩（浅い湖）に対して、華麗に飾り立てた讃辞をあまり用いませんが、心の中でとて  
も愛着を持っています。毎年觀世音菩薩の誕生日には、社日（土地の守護神を祀る祭日）  
用に準備します。“仙卷（祭り用に書かれた祈祷絵）”に願いや誓いをし、“堂名（家の  
呼び名。屋号）”を唱えたりします。菩薩を拝んだり、客を招き入れます。この祭日の一  
面は神靈に降臨してもらい福を授かり災難を祓ってもらいます。その役目は千年の大亀（言  
い伝えによると、この大亀は觀音菩薩の仮の姿とのこと）にも担ってもらいます。もう一  
面は豊作を感謝し、人々が益々栄えることを慶賀します。

数十年月日はあっという間に過ぎ去りました。私の母方のおじの家がある陳家灣は、都  
市化の波に伴い、小さな村落から天地がひっくり返るような変化をしました。しかし、今  
も私の心にある湖の光輝く水面、人情味溢れる地域の人々、広々とした元蕩、澄み渡る湖  
水、ありありと目に浮かび、懐かしさが募ります。“月は未だ眠らないことを知り、呉歌  
において郷里を思う”と言った心境なのです。

楊逢春 2017年2月26日